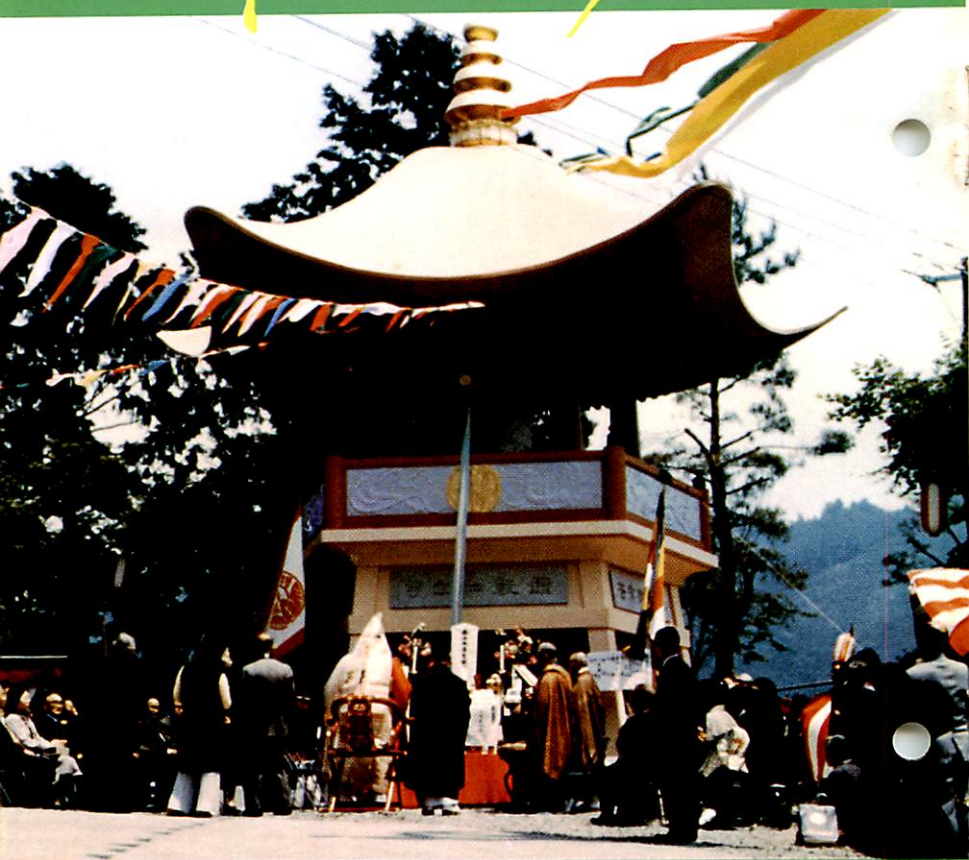


GR  
白雲禪

# とりお



42

埼玉、名栗、宗教法人  
昭和53年5月1日 白雲山 鳥居観音

# 表紙の説明

## 大鐘楼 52年4月14日落慶

白雲山々腹 設計考案平沼桐江

高さ 10m

バリ島にあった鐘楼のやしの葉ぶきの屋根の美しさを取り入れた。

鐘 高さ1,7m 口径1.2m 重さ3トン

題字 松田江畔先生

除夜の鐘修行します。(53年12月31日23時)

## とりゐ第42号目次

裏表紙	夏の記事案内と案内図	鳥居観音だより	田舎医者(其二十二)	西遊記(其三十五)	観音行の実践	道光禪師御法話(其二十四)	補陀洛山	表紙
		……………	見川鯛山……………	岡部千三……………	光山善雄……………	……………	尾尻天外……………	大鐘楼と説明
		十七	十二	九	六	三	一	

補ほ陀だ洛らく山さん

鳥居観音

尾尻天外

身軽になつて冬を越した樹々が、精一っぱいの力をしぼつて枝先を空に向けている。

蒼く透きとる空に浮んだ白雲を仰ぎながら、春ももうすぐだと、心のほころんだ二月。

床の間に、この土地では早咲きの梅の小枝、ほのかながら清らかなその香りは、厳しさに耐えて来たもののもつ格調があり、誇張するでもなく、しかしためらいもなく真直に伸びる青枝の稟々しさは、そのまま人に哲学を語りかける。

梅は古くから、神木として重用されて来た。

冬芽が次ぎ次ぎに赤味をさして、柔らげにけふる紫つつじ、紅つつじ、どうだんつつじ、四月から五月、このお山はとりどりに彩られ、萌え出る若葉と共に、観音さまの裳裙もすそは一面に染められる。

連休には殊更、弁当持ちの家族連れで賑う。

車参道を少し離れて蛇行する歩道は、花のトンネルかと思われる。はしやく子等は嬉々として、身を躍らして一気にその花坂を登る。足のおくれている大人達に、声をかけんとして振り向くその眼に、思わず飛び込んでくる眼下の景観、白く光る切れ切れの清流、胡麻塩にも似たた車が、電池仕掛けで動いて行く。

緑と紅の中に点在する堂塔。わが国には数少ない三蔵塔さんざうたう、仏舍利塔ぶつせりたう、納経塔のうけいとう、連峰を背に立つ清々しいまでの白亜の大観音三像、肩をかすめて舞う山鳩、裾に戯れる小鳥のさえざり、その昔、仏の座に迦陵頻伽かろうびんがという鳥が、美しい声を添えたと経文に出てくる。まこと天地恍惚の境である。

大観音の堂内に、阿弥陀如来あみだにらいと脇侍菩薩きせしぼつ、吉祥天きちじょうてんに不動明王ふどうめいおう、十二神将じふにしんしやうに三十三観音が祀つられる。

数十に及ぶこれ等の尊像、境内全山に亘る数かずの  
仏像が凡て、この鳥居観音創立者平沼弥太郎桐江居  
士自身の作である。信心深かった亡き母親の願いを  
継いで、先祖の遺されたこの山の大檜での一本彫り  
である。何百年とも知れない先祖の希求の結願が、  
み仏の導きによって、いま仏像に化身されたと思え  
てならない。

内壁に、小さな観音像一万体が納められている。  
ここに参拝された人々が、わが家の先祖供養のため  
祀つられたもので、今もその申し込みはつきないが  
白無垢のそのお姿は、子孫の敬虔な祈りを表象する  
かのように、尊とく美しい。一万施主の累代にのぼ  
る数知れない霊が、み仏と一座に安らいでおられる  
ことを、のぼる香煙の中に立って、ひしひしと感ず  
るのである。

堂屋根の四隅に四天王が立ち、外壁面には、観音  
功德図が三方に彫られている。

山の中腹に立つ仁王尊、金剛力士とも呼ばれ、五  
百の夜叉を従えて、一切の災悪を調伏するという。

その仁王の忿怒の形相の表現に苦心された作者は、  
鏡に自身の怒った顔を写してみたのが、一番参考に  
なったと語られる。

本堂には聖観音を本尊として、十一面観音、千手  
観音、如意輪観音など七観音が、鳳凰や天女の舞う  
極彩色の中に、静かにしかも莊嚴に祀つられている  
七観音のうち如意輪観音は女性のお姿を示されて  
いるが、細く長く剃り作られな眉、漆黒の瞳を伏せ  
られての麗わしいまでの眼な差し、微かに笑みを含  
まれる唇は朱紅に燃えて、妖しいまでに生ま生まし  
い。豊艶な頬に人指ゆびをあてて思案される女菩薩  
の体は乳白色に彩どられて、ゆらぐみあかしの奥に  
浮ぶ。作者桐江居士芸致の極むところである。

境内数十万平方米、山紫水明、幽邃たる連峰、四  
季とりどりのたたずまいは、そのまま、観音さまの  
お住いになられた補陀洛山といえるのではあるまい  
か。



道光禪師  
(故高階瓏仙猊下)

御法話

(其の二十四)

禪の宗意から仏教を話す 前号につづく

五

それをたいいていの者は、仏にたのんでおいたから、あとは向こうのお責任だというように、責任を神物に持たせてしまうのですが、それではいけません。向こうに拝む神仏は、むしろそれを対象に、自分の心の奥にある神仏をひき出すことが大切です。

ちようどご婦人が、お化粧をするのに、鏡の前に立って、自分の顔を向こうに見て、そうして化粧は手前の自分の顔に、すると同じわけで、おたがいは自分の心に、神にも仏にもなり得る本性を持っていきます。だからその自分の心の姿を、向こうの神仏にうつし、礼拝するのは、かえって自分の化粧をするのであります。心の神仏をみがき出すのであります。

から、神仏を拝むことは決して恥かしいことではありません。

神仏に頭をさげるといふことは、やがて自己を尊重する結果になるのであります。そうであるのに、どうも神仏を拝む場合、横や、うしろを向いてみて人がいなければ、ちよつと拝む。人が見ていると、恥かしいのか拝むのに遠慮する風がありますが、要するに自己の人格を神仏のごとく向上しようとするすなわち、自己尊重のためには、少なくとも一度ぐらひは神仏の前に心から頭をさげて自己を照らすことが、必要であります。またそうしなければ真個の人間にはなれませんから、心から神仏を拝み清い心にたちかえるということが、信仰による人格の修養であります。

沢木和尚の法語に、

「およそ、心あるものは、心の養いなかるべからず、武家は武にして工夫をなせ、百姓は耕しながら工夫をなせ、貴賤男女その職ありながら、なすべきは仏法の信心なり」と、示されてあります。

人間は心に広い世界、明るい世界をひらいていくようにしなければなりません。ただ目さきばかり見ていきまされたのでは、きゆうくつで、くるしくて、しかもさびしい渦にまきこまれて、ついには自分で自分が救えなくなってしまう。全体世の中のこととは、かれこれ云っても仕方がない。それで世の中に処していくには、自分で自分の内面に強く明るい天地をひらいていくことが必要であります。

ばい菌をこわがっていては生きてはいられませんが、どんな場合でも、そのばい菌に感染しないようにするには、自分を健康にするより外にはないのと同じで、今の社会に処して生きていくには自分自身を強く生かすことが第一であります。それには仏教の信心ということについては、いろいろの解釈もありますが、以上のような意味に信心を理解していたゞきたいと思うのであります。結局それは自分自身が自己の真価を向上すことになりす。

しかし、信仰も程度問題でありまして、「どうか病気をなおして下さい」とか、「どうぞ、宝くじを

あてて下さい」などと、こんなことを一生けんめいに祈る。それはただ利己主義の信仰で、そういう程度の信仰というのは、拜んでもご利益がないと、神仏に不足を感じて、あちらでもいけな、こちらでもだめということから、信仰乞食になってしまうのであります。

親は子供の無理もきいて下さるのが慈悲であるように、われわれの及ばぬことを訴えれば救ってくださるのが神仏のお慈悲でありますから、そんな目前のことでも信仰にはちがいないのですが、それではまるで神仏を我欲の媒介者のように思っている、はなはだ低級な信仰であります。そこで信仰は、もう一歩進んだところにいって欲しいのであります。

ちようど二宮尊徳翁の観音信仰のような、あれでなくてはなりません。二宮翁が十幾才のとき、観音の辻堂へ旅僧がまわってきて、観音経を誦みましたたぶん訓読だったでしょう。それを聞いてみると、チラチラ意味がわかる。それから大変ありがたく思つて「どうか、今のお経をいま一度よんで聞かせて

下さい」と云って、観音経を聞いて、観音の精神を受けたという信仰であります。

だから、尊徳翁が観音を信じられたのは、普通の人とちがっています。ただ希望を満足する拌みではありません。この信仰で、尊徳翁の報徳が生まれたのであります。だからこういう人が地方に一人でも多くできたならば、その人格の光明が地方を照らし、社会を浄化し、偉大な救済ができるのです。

おたがいに目前に必要な物質の問題も、どうかしていかなければなりません。宗教方面の立場からいえば、まず、自己の完成からしていかなければならないと思うのであります。

## 六

東京におられる人で、浜地八郎という居士があります。天松居士といっておりますが、その人が仏教世間篇というものを書いていきます。これは同居士が金剛経の信仰と、参禅の見地から実社会の上に、仏教の信仰を生かしていく、すなわち仏教の真生命を示してあります。かんたんなものでありますから、こ

れからそれを参考に、ことばをそえてお話ししたいと思います。

これは表題のように、仏教と世間とは、はなれるべきものでないことを説いてあります。それで、まず、仏教の原理から説いてあるのですが、その原理は「空」であると基準してあります。それは仏教では、一切法の根源は、みな空である。けれどもその空は、世間でいう一方に物があつて、一方になにもないところをいう「空」とは大いに意味を異にしています。

ふつうにいう空は、物のあるのに対して、ないところを「空」というので、「カラッポ」の意味をあらわしているのであります。そういうのは、仏教では断空、あるいは断無といって、内容空虚の空であります。しかし今、仏教の教理として、説くところの「空」は、これを「真空」といいます。

もっとも、今日、真空ということばは科学でも使われておりますが、それとも意味がちがいます。

(以下次号)

# 観音行の実践

兵庫 県

光山 善雄

## 一 愛情と親切を支える人間になる

夫婦間の愛情、親子間の愛情、今の時代に物は十分ありますが、一番欠けているものは愛情ではないでしょうか。

夫婦間の愛情が欠けますと不平不満が出て離縁となる危険があり、親子間の愛情が欠けますと遺産の争いと展開いたしましたしょう。

経典には「和顔愛語」とあります。

## 二 規律正しい生活をする

これは正しい生活面ですが、朝は何時に起き、夜は何時に床につく、働く時間は八時間、食事をする時間、正しい生活、永生きの基であります。台所一つ見ても整理整頓されている家庭は繁栄いたし、お

なべの中に茶碗や皿がつけてある家庭や、便所の掃除を怠っている家、紙屑が家の中にも外にも乱雑に散らばっている家庭は貧乏神がやって参ります。福の神は逃げてしまいます。仏壇の花が枯れていることは心が信心なく枯れているがらす。よく掃除をされる家庭からは美人が生れます。玄関の入口を見ただけで家風が判明いたします。東京オリンピックで世界の選手達の行進の姿、規律正しい行進入場の姿、実に感激の涙が湧き出しました。

## 三 忍耐心のある人間になる

三日坊主では駄目、石の上に三年どころか二十年の辛抱が必要です。この世を娑婆と申します。娑婆とは忍土にんどと訳します。北海道の札幌にしましても百年前には人家が二軒程でしたが、これが人口が増加して今は八〇万人となり将来百万となりましょう。開拓当時から辛棒した人が成功者となっています。成功者は規則正しい忍耐心の実践者です。

今の時代は何でもすてる。クツも古くなったら捨



てられる。然し愛情親切まで捨てたら世の中はどうなりましょう。家庭は破かいされましよう。老人ホームが全国に五百ヶ所程できましたが、老人福祉法第二条には「老人は多年にわたり社会の進展に寄与して来た者として敬愛され、且つ健全で安らかな生活を保証されるものとす」とあります。

老人全部が収容されるわけでもなく、その一部の人のみが恩典に預っておりますから、どうしても老人は家族の一員として、各家庭に於て生活せねばなりません。若者が座席をとり、七〇才以上の老人が立ちん棒の姿は日本の現状で、外国人にはづかしいことです。

こんな小さな親切一つが実行出来ないのは道徳教育がかげ、宗教が心の光りとなっておらないからでしょう。人様より物を戴くだけの人間でなく、すべての人に親切を与える人間になることが観音行の一つであります。

朝のあいさつに「お早うございます」とやさしい親切の言葉は人間を生かし、明るくいたします。

その人の言葉一つで人格がわかります。老人であればなおさらに愛される言葉を使ってよいお爺さんよいお婆さんであって欲しいものです。

農家が夏の炎天下で田の中で雑草をとる、これは農家の「ノコギリ」だ。秋になるとお米の収穫の目がある。若い時は苦勞することが出世の道でありこの「ノコギリ」の仕事を怠る者は人生の落第者であります。

朝ねして仕事もせず、毎日なまけの生活をして、今に棚からボタ餅がころがってくる夢を見ている人よ。棚にはボタ餅がないからころがってこない。働け、勤勞は人間の生きる道だ、なまけは死の道であります。

仏法を聞くとは自分が仏になる道を知ることです。道元は戒律が仏法であって、戒律なき者は僧でない、きびしく戒律を説きました。

然し親鸞はその反対に人間として戒律等、できはしないと自己を反省して、罪惡深重を叫びました。然し道元の説いた戒律は仏法の五戒であり、この

五戒は道德の基本であり仏法の道標であります。

この五戒の「ノコギリ」を人間に教えたのが釈尊であり、道元ではなかるうか。親鸞しんらんの教えは聞法を「ノコギリ」とした。教えを聞け、ハイと聞け、ハイと信ぜよ。聞即信を叫んだのが親鸞聖人でしょう。聞法は尊いことだが、火の雨を受けても聴聞の熱心がなかったら聞き開くことは出来ません。聞き分ける人は学問仏教であり、だから「聞き分ける人」はあれども聞き得る人は少ない。

親鸞は二〇年間「ノコギリ」の役目を実践されたのです。出家とは家を出ること、重荷を捨てて、身がらになって、家を出る、これが重荷がありすぎて仲々家を出られない、だから出家でなく、在家であります。伝道とは歩むこと、道を歩くこと、今の宗教家はその歩いて法を伝えることを忘れていたのではないでしょう。又一般の大衆も自然を忘れて、青空を忘れて。自然の中を歩むこと、観音霊場参拝は歩むことを教えております。歩くことが身心の健康とつながります。

#### 四 勤労を楽しむ人間になる

ハワイを訪問視察した時、聞いた事ですが、今日系人は二十三万人、ハワイ人口七〇万の三分の一をしめております。百年前ハワイ王様の招きにより日本人より移民が数百名参りました時は言葉も通ぜず生活も異り、非常に苦勞いたし、馬小屋の中で寝起きをした方もあったと申します。寝ておると背中がぬれているので見たらお隣りの牛の小便が流れて来ていたためでした。

かかる苦勞の中より子供を育て、教育をして、財を貯え今はその実が結ばれて、成功者を出し第二世の中より代議士「国会議員」も出る、大学教授も出る。ホテルの経営者も出て又一方宗教方面もすばらしい寺院が信仰の結晶として建立され、本願寺別院や、曹洞宗別院等豪華な殿堂を始め、約百ヶ寺程の寺が創立され、皆生活に直結しております。

「動く人はあれども働く人少し」「勤勞は生きる道にして、怠惰は死の道なり」  
(以下次号)



## 西遊記

(其の三五)

岡部千三

### 老君と青牛(つづき)

お釈迦様は、おだやかな声で、悟空に……

「おまえは、三蔵法師のともをして、経文をとり  
にくるはずだったのに、法師といっしょでないとい  
うのは、どういうわけだな。」

「おそれ入ります。じつは……。」

悟空は、独角大王に法師をさらわれ、それからの  
ち、くるしいたたかをした話をした。

「独角大王という怪物は、いったいなにものでござ  
いましょう。それをおしえてください。あの怪物  
の正体がわかれば、いくさのしかたをかんがえなお  
すことができます」

「そうだったか。わたしは独角大王の正体を知ら  
ないでもないが……よいとも。わたしが力をかして

あげるから、じぶんでとらえるがよい。」

お釈迦さまは、悟空に十八つぶの金丹砂をあた  
え、十八人の羅漢というでしを、みかたにつけてく  
れた。

悟空が羅漢といっしょにせめていくと、独角大王  
は、また大声でわめきたてた。

「さてさて、うるさいさるめ、またやってきたか  
だれをつれてきたって、おまえは、わしにかなうも  
のか、けがをしないうちに、とっととかえつたらど  
うだ。」

門のまえにつつ立って、ばかにしたようにわらう  
のであった。

「ところが、そうわいかない。」

悟空も、まけずにののりかえした。

「おししょうさまをわたせばいいが、まごまごし  
ていると、こんどこそたたきつぶすぞ。」

「はははは、こんなぐあいにやるとでもいうのか」

独角王は、槍をしごいて、いきなり悟空についで  
かかってきたが、

「おっと、それはちがう。たたきつぶすというのは、こんなぐあいにやるのだ。」

悟空は、大王のつきだした槍をひっぱずして、

「いまだっ、それっ。」と、十八人羅漢に、あいづをした。

羅漢たちは、お釈迦さまからわたされた金丹砂を右から左から、大王めがけて、びゅうびゅうとなげつけた。

金丹砂というのは、目つぶしの砂で、おまけに、なかなかふしぎな力をもっていて、この金丹砂をなげつけると、独角大王の足もとの土が三尺もへこんで穴になって、大王は、その穴へ、どっところがりこんでしまった」

「これは、おとし穴だな。悟空、ずるいぞ。」

ぱっと、大王は穴のへりへとびあがったとたんにまた一尺ほど、穴はふかくなつた。

「ええいっ。やっ。」

さいごの力をふりしぼった大王が白い輪をなげあげると、十八つぶの金丹砂は、みんなすいとられて

しまった。そして、その間に穴をとびでた大王は、門の中へかけこんでしまった。これには、悟空も、羅漢もおどろいてしまった。

「ああ、えらいげものだ、せっかくお釈迦さまにいただいた金丹砂も、やくにたたないか。」

なげきかなしむ悟空を見て、

「気をおとしてはだめです。まだ方法がありますよ。」といって、羅漢がなぐさめた。

「お釈迦さまもだめなのに、どんな方法かあるとこののです。」と、悟空は心ぼそくなった。

「お釈迦さまはおしやつた。金丹砂がすいとられたときは、太上老君をたずねて、怪物のことをきくようにと……。」

「そうか、では、ひとつぱしりいつてくる。」

そこで呼んだのが、一とび十万八千里のきんと雲である。悟空は、老君のところへとんでいった。

「たいへんです。一大事です。おししょうさまのいのちがあぶないのです。独角大王という怪物がいて、白い輪で、何でもすいとってしまいます。」

「ほう、するとおまえでも、大王にはかてないのか」

こういわれて、悟空は、はずかしそうにうつむいていた。

「いじわるをおっしやらないで、たすけてください。あの怪物はなにものです。白い輪にはどうしてあんなふしぎな力があるのでしょうか。」

「それは、わたしの宝もの「金剛琢」にちがいない。ここの牛が一びきにげたが、独角大王とは、そいつがばけた怪物だろう。これはほうっておけないわたしもいこう。悟空、あんないいたせ。」

老君は、悟空にあんないさせて、独角大王のやしきへいそいだ。

「はじめからわたしがでては、まずい、悟空、おまえが、その大王とやらをよびだしてくれ。」

「はい。ただよびただけではつまりません。ついでに、うんとわる口をいってやります。」

悟空は門のまえへいって、

「独角大王の、ばかまぬけのよわむし。わたし

は齊天大聖孫悟空だ。でてこられるか。おそろしくなって、でられまい。」とさんざんわる口を並べたてて、おこらせようとした。

「よわ虫はそっちだ。まけても、まけてもやってくるおまえこそ、ばかな、まぬけだ、くやしがる。」

大王は、槍をもつて、のっしのっしとでてきたが目のまえに、にっこりわらつて立っている老君を見ておどろいた。

「あつ、あなたは……」

にげようとするうしろから、老君は、ばしょう扇で、ふわりと、ひとあおぎすると、大王は、くるくるとのたうちまわつたあげく、一びきの青牛になつてしまった。青牛は、もーとないた。

「悟空、さらばだ。」

老君は、青牛の背にのると、五色の雲をよびよせて、あれあれというまもなく、空高くのぼっていった。

悟空は、ほら穴のおくへはいって、三蔵法師のなわをとぎ、八戒も悟浄も、ぶじに助けたした。



## 田舎医者（其の二十二） 見川鯛山

### 中気のめんどり

麦が青い縞をつくって遠く高原へひろがり、ところどころ菜畑が絵具をなすったように真黄色い。

その花を追って蜜蜂が肩をかすめたとんだ。

麦の丘の向うの県道を、バスがピカピカ光りながら登っていった。どうやら私は、きょうも乗りおくれたようだ。

だから、もう急ぐことはない。

重い往診鞆をぶらさげて唄いながら野道を歩くと高原の太陽が、背中にポカポカと暖かい。

田圃道から県道へ出る四つ角に、駄菓子屋のおシモ婆さんの店がある。そこが、去年からバスの停留所になったのだ。

バスが停れば客足もふえる、そこを見越して、婆さんは抜けめなく酒も煙草も雑貨品も売りはじめ、店をますます繁昌させた。

七十を幾つか越えたおシモ婆さんは、魔法使用のようによせかけて腰か曲がり、小さく縮んだその体つきは欲だけが残ってこりかたまったみたいだ。

亭主の余平さんは婆さんより十も年下だが、怠けもので、鯨のように肥った人のいい男で、おシモ婆さんの三人目の亭主である。前の二人はどっちも二、三年でさっさと婆さんから逃げていったのだ。

余平さんもそうしたかったのだろうが、運わるく中気になって、足腰が立たず、そのまま観念してずっと床にねたきりだ。

昔、余平さんは納豆屋だった。色の白い円満な顔が役者のようにいい男で、その売り声が自まんであつた。彼は、町の納豆屋から品物を仕入れ、この村の部落から部落を、自転車で積んで売つてあるいたキコキコと、ペダルを踏みながら、納豆を呼ぶ余平さんのいい声が、長い尾を引いて夕べの田圃をのどかに流れていった。

二度目の亭主に逃げられたばかりの中年のおシモさんは、この時間になると、いつも戸口に立つてそわそわしていた。

やがて、夕もやの中から余平さんが姿を見せると彼女は顔のどこかに生娘のような恥じらいを見せながら、彼の納豆を欠かさず買った。

ある、もやの深い夕方のことだった。道端でとうとう余平さんが年うえの彼女を抱いた。しつかりと朝の露にぬれながら、余平さんの自転車がおシモさんの店先に夜どおし立て掛けられたままだつた。

二、三日すると余平さんは、気軽な独身男の荷物をリヤカーに積んで、おシモさんの家へ引越してき

た。そして、それっきり彼は納豆屋をやめた。

毎朝早くおシモさんだけが起きた。雨戸を開けると、汗にしめつた二人の部屋を、爽やかな朝の風が流れた。そして眩しいその光の中で、余平さんは頭から蒲団をかぶつていつまでも眠っていた。

半年たつと、余平さんはすっかり怠けものの亭主になつた。彼は鯰のようにブクブク肥り、毎日酒ばかりのんだ。このころ、彼は、パチンコも、軍鶏の賭博もおぼえ、競輪の町では、夜の女を抱いた。そして、幾日も帰らぬ夜が続くようになった。

働きもののおシモさんは、更年期の、やり場のないゆううつを、余平さんにたたきつけて、朝からどなりちらした。

「この、グータラ男め!! たまにア仕事する気になつてみる!! 能なしの、ゴクッ潰しめ!!」

だが、このゴク潰しはえへらえへら笑いながら、毎日、鯰のようにしらばくれ、おシモさんの家逃げだすことばかり企んでいたのだつた。

そんな矢先に彼が中気で倒れ、それから二十年、

ずっと床にねたきりである。

私は次のバスを、停留所のおシモさんの店で待つことにした。彼女は私を見つけると、天井からぶら下った簾だの麻紐だのたわしなどを掻き分けながらしわくちャの顔を出して云った。

「うちで、往診なんか頼まねかったど!!」

勝手に往診して銭を取るなど云うのだ。

「往診にきたわけじゃない。バスの時間まで、私は待ちながら菓子を食べるんだ」

「そんならばお客様だわな。ま、こっちさ来て腰かけなせ。俺悪いけど、医者様も押売りするようになっただべかと思っただ」

と婆さんが牙だけ残ったがらあきの口でフツツと笑った。

「これ評判のいい菓子だ、みんながうまいって買うだぞ」

彼女が勝手にきめて、汚れた皿に黒砂糖の菓子を盛ってだした。

「五十円だ」

現金で払ったら、洗ひ茶をくれた。菓子をかむと涙がにじんだ、それが蹄鉄のように硬いのだ、おそらく一年も売れ残った奴か、馬に喰わせる菓子だろう。私をもぐもぐと口の中で難渋してのを、婆さんはそっぽを向いて知らん顔をしていた。

「味はいいが、私にはどうも、婆っばも一つどうだね?」

私がすすめたら、婆さんが拒んだ。

「俺、腹くちいだ、でもせっかくだから、爺さまに食わせべ。あいつ、これ大好きなんだ」

そして、彼女が奥の方へ大声で言った。

「ほーれ、爺さまよ。先生が菓子御つつオすつとよ!!」

「爺さん元気かね? ついでに見舞ってやるかな」

私が云うと、おシモ婆さんが言った。

「ンだな。どうせ、ついでだもんな」

納戸は、半分が物置部屋で、シャボンや菓子の箱が高く積み重なり、その薄暗い穴ぐらに病人がねて



いた。

余平爺さんは青つぶくられて、笑ってばかりいる。

笑い中氣という奴である。

「爺さまよ。先生さんがついでに見舞ってくれつとよ。仏様みてえな医者様だよ」

案内しながら婆さんが云った。だが上の空なのだ。彼女は辺りをキョロキョロ見回して、品物の在庫を算えていた。

枕元へ座ると、余平爺さんがそつと私にささやいた。

「婆あのへソクリ、昔盗んで、俺ここさ持つてるだ、往診代、俺払うかんな……」

と息を殺して、楽しそうに笑った。

湿って重い蒲団を剥ぐと、病人の汗が匂った。そして、不思議にも、鶏の卵が十五、六余平さんの脇腹のあたりに転がっていた。

「おや？ 爺っち、あんたが生んだのか」

「まさか、俺生んだわけねえだ。婆あが抱かせただ。ヒョッコにするだつとよ。最初、俺、なんぼに

もいやだったが、今んなつてみつとメンコイだ。あと二、三日で、ヒョッコになるんだ」

と、中氣のめんどりが目を細め、少し散らばった卵を大事そうによせ集めた。余平爺さんは血圧も心臓も丈夫でブリモースみたいに栄食がいい。まもなく生まれる十五羽のヒヨコに、腋の下や下っ腹をくすぐられながら、ゲラゲラ笑って、まだ当分永生きできそうだ。

## 天皇陛下バンザイ

某月某日。天皇、皇后両陛下が東北本線黒磯駅のプラットホームへお召し列車から降りられた。

もうずっと昔からいくたびとなく乗り降りしていただけるこの黒磯駅が、陛下は大のお気に入りだった。つい先日、青森の植樹祭に行かれる途中、陛下はこの駅の駅弁を買って昼食をとられたほどの親しみようであったのだ。ホームに降りられた陛下は、グリーの背広に中折れ帽子、皇后様はクリーム色のスーツに、ピンクのレースで飾ったかるやかな帽子で、

ごくくつろいだ服装であった。そして、これからの十日間をすこす美しい初夏の那須高原へ、もうすっきり心はずませて、その柔和な顔をほころばせていた。

だがそのブラットホームには、カメラの放列と、黒い礼服に身を堅めた紳士たちがひしめき合つて出迎えていた。そして、彼らを代表して知事や県会議長が型どおりの歓迎のあいさつを送り始めた。すると陛下のほほ笑みがいっしか消え、あとは堅い表情で、まっすぐに立ったままそのあいさつを受けた。

駅前広場には、この町の小学生、中学生、高校生をまじえた二千人の人だかりがあった。先日の弁当以来、この地元の人人の陛下への近親感がひたむきに高ぶり、かつてなかった腹からの楽しい出迎えであった。

すると陛下の顔が再びほころびをとり戻し、厚い眼鏡の中の目がこやかに笑い、手をふつて人人の観迎に答えた。それは、スターずれた芸能人や運動選手たちにはできないあの、ぎこちない素朴な手

の振かたであった。

やがて、陛下の行列が駅前の広場を出発した。先頭は二台の白バイだった。そのがんじょうなオートバイがけたたましい爆音をあげて、道路の邪ま者たちを威嚇しながら走ると、そのあとを警察のオープンカーが陛下の車を先導して走り、続いて警察本部長の車、知事の車、県会議長の車、そしてあとはもうごたごたと、附近の市町村長や議員たちの車が、それを追いつき、際限のない無用な行列となつて、高原を登つていった。

日の丸の旗に埋まった黒磯町を、出ると道は大きく左へ回つて一里の松並木を通る。そこにはもう人がげはなかった。濃い緑の松林の間で、水楢やもみじの若葉が、まだ淡く、白っぽい青さで新緑のおもかげを残していた。

松並木が終ると、そこから一気に明るいな須高原が開け、その正面に黒尾屋、南月、茶臼、朝日、三本楯の五つの峰が見えた。陛下にはすっかり見なれたなつかしい那須連山であった。(以下次号)

## 鳥居観音だより

### 終った行事

○初めてつかれた除夜の鐘

昨年五月、白雲山の山腹に落慶した、大鐘楼の第一回除夜の鐘が修行された。

本堂で関係者一同、除夜の読経に参列したのち十二時十分前に大鐘楼へ集合。

大鐘楼前の広場には薪をもし、かがり火が赤赤とあたりを照らし、居並ぶ人々の顔が闇にうかび出た。そばの椽台には甘酒などが用意されて、参加者にもてなされ、口々にうまいうまいと云っていた。

丁度十二時の針に合わせて、第一の鐘が尾尻老師によってつかれた。

読経にしたがつて、第二、第三の鐘が百八まで、参加者の順につかれた、遠くは毛呂山町からの人も

来られていた。心配した雨も止んで、空も十時頃からうすくもとなってきた。

除夜の鐘かつかれていく程に、雲は切れ、もやは名栗谷に下って、東の山の端から二十日余りの月が上って、雲間から現われた。

白雲山の木立は墨絵のように、立ちこめるもやの中にうかび出た、雲をはなれた月が鐘楼を照らし出した時は、一同感激し、思わず合掌をした。

昭和五十三年 零時三十分ようやく百八の鐘もつき終えて、ホッと吾に返ったのである。

初めての除夜の鐘が沢山の参加者によってつきなされたことも、一大記念として残る。

本年の除夜の鐘は又一段と多くの参加者によってにぎわうようねがつて止まないものである。

○新年祈禱に二十年

一月一日新年祈禱は十時から修行しているが、毎年必ず参拝かたがた、祈禱札を受けに来山なさる方で、もう二十回になる、川越の原田愛助氏がある。

原田さんはいつも、見るからに健康体そのものである。もう七十有余才であるが、そのお心がけには敬服している。いつもご一行は五名である。

本堂で祈禱中も単座して、読経をなさる、その様子を見ても、観音信者の威風がみなぎっていた。

庫裡での、ささやかな、新年の祝宴も、話は開祖平沼先生ご夫妻のお話から、毎年必ず、参拝して、記録をつくるのだと、親しく語られるのも、新年でなければうかゞえないところである。

お蔭でこうした信仰厚い方々によって、年と共に祈禱札も増加し盛大になり、人と人の交流も深められていくことに、よろこびを感じるのである。

### ○新年の祈禱二千枚

昔から新年の計は元旦にあり、一日の計は朝にあり、と云われている、まさにそのことが、新年にのぞんで、心構は勿論、それぞれの家庭、職場に於て心より所を基本として、祈禱の御申し込みが沢山あった。

入学試験を目前に控えてのお家では、入試合格の

願意の祈禱、毎日仕事のために、通勤を自動車でされる方は、交通安全、ご商売の方は、商売繁昌と、云ったように、その願意は種々あった。しかし一番多く申し込みのあったのは、家内安全が絶対多数と云ってよい、それは一年間が、家内安全、すなわち無事、豆息災で、何事も安全、と云う、いろいろのことをふくめての願意が一番だった。

年々新年祈禱がご関係の方々のお世話によって多くなることは、修行する立場として、何より有がたいことで、これ、大いにつとめなければならぬと、一そう身の引しまるを覚える次第である。

新年の祈禱によって、ご利益がこのようにあらわれたと、云う立証すべきものもあるだろう。

毎朝、お札を祀った棚にお水を上げ、灯をともし、その日、その日の処生を祈ることが、一年間の無事への道しるべとなることでもある、信仰とはそう云う心、態度によって、救われ、育てられるのではないだろうか、信の一字でありましょう。

今年も皆様の無事を心からお祈りいたします。

## ○雪の白雲山

一月十八日、久方ぶりに待望の雪が降った。冬は雪が待たれるものであるが、本年は年末から、暖冬で、しかも降雨もなく、乾く日が多かった。

雪やこんこん、あられやこんこんの歌も縁が遠くなくなって来て、子供達も歌わなくなった。



雪化粧した白雲山の初雪

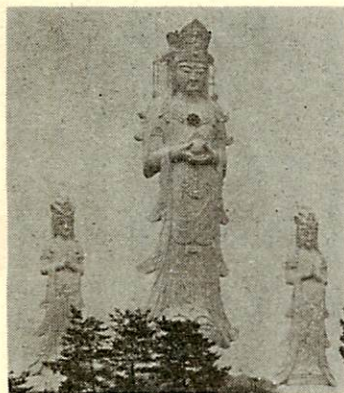
この日や  
と朝から  
雪が降り  
はじめて、  
午後まで  
降った。  
おかげ  
で、空気  
もしめり、  
火の元にも  
植物の生育  
にもほっと  
した。雪は、  
三寸位積った

ので、白雲山は一面の雪化粧で、久方ぶりに雪の美観を満喫することができた。

## ○節分会

二月三日、恒例の節分会、午後一時三十分、尾尻老師に、寺務所員が伴をして、福豆、節分会の大札を持って、救世大観音に参り、法会祈禱についで、豆を撒いた。

三蔵塔から、大黒殿、仁王門、子育て蔵と撒いて下山し、最後は本堂に於て、法会后、福は内、福は内、福は内、福は内、……大声を発して、老師がおまきになった。



立春の救世大観音

明日から春  
だと思うと  
今までかた  
くなってい  
たからだも  
何となく、  
やわらいだ  
思である。

○白雲山の浅い春

立春が、春への門と云われているが、年によって、この門も、

あかないことがある。本年は、

立春すぎても寒

い日が、ぶり返

して、春はまだ

遠い感じがし

た。三月中旬に

なったら、境内

の草木の色も、

次第に色づいて、やっと春の息吹きを感じるようになった。

本堂前の石段の上り口に石のこま犬が置かれている。参拝客は、このこま犬を見て、ほほえんでいる。面想到心に心をはかされて、共に笑っていられる。

本堂周辺の草木の芽が、春の色を日にくくするとこのこま犬は、まっ先に近づくと春をよろこんで仲よ



本堂前のこま犬

く笑み交わしているかに見えるのである。

○梅と三ッ葉つつじ

白雲山麓に梅の木が、散植してある。庫裡の南方の斜面にそして、竹林のある谷に植え込まれているが、早咲きの梅は二月から咲き始める、その中には何本かの紅梅が早く咲く、斜面の、枯芝の原の中に咲くので、一番目立つのである。

それから白梅となるが、咲いている期間も一ヶ月に及ぶので、何の花もない折から心も目もなごやいでたのくしなる。

トーテンポー

ル近くのを谷をはさんで咲く白梅は四月初旬まで咲いているので三ッ葉つゝじへの美の橋渡しをしてくれる。よい花である。



梅の花園

三月末になる

と、三ッ葉つ

じの花の紫が、

葉の出ない時に

つぼみをふくら

ませて、日毎に

紫色をのぞかせ

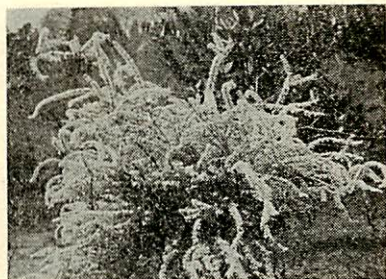
るのである。山

はそろそろ、萌

え黄いろになっ

て木々の梢が芽吹いてくると、全山紫の花が咲き乱れてくる。この花は名栗地方の山地、岩山に自生するむらさきつゝじ、と云われている花木であるが、この花を開祖平沼先生ご夫妻は好まれて、自生のものから、移植のものを入念に施肥、管理されてこのような、すばらしいつゝじ山となさったことに対しこの花の頃になると、心から感服するのである。

むらさきつゝじの花は……四月初旬から、山上へかけて、咲きうつっていくが、その見頃と云えば、



ゆきやなぎもつづじの中に

四月の中旬が、いつもうつくしく、山内に入る人の顔も、花のむらさきにそまるかのようである。

○その他の花木

白雲山の花木は数知れない。

吉野ざくらと山ざくら

梅が終るとこの花が咲き次いでくれる、朝日にかがやく白雲山のさくらは又見物である。

ゆきやなぎとれんぎょう

純白の花が、柳のように咲きたれて、園内に点在して、本堂付近と、庫裡の付近に咲き乱れる。

○百花らんまん

三月になる

と、山内の椿

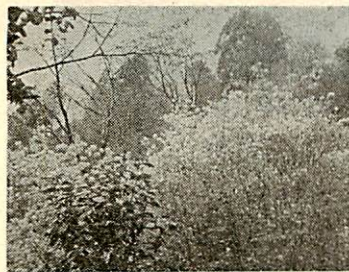
が、咲き出す。

大きいのは、

仁王門付近の山

椿で、野趣ゆた

かな花が咲く。



白雲山の満開のみつばつづじ

○春の行事

四月十七日 春季例大祭 十時三十分

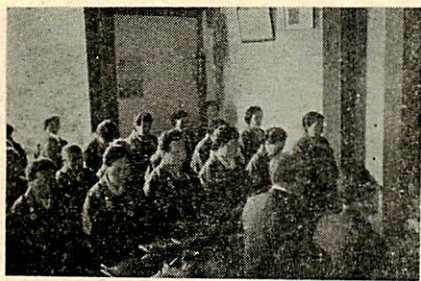
恒例の春季例大祭は、多数の参拝者をお迎えしていつも修行するので、年中行事としては、大きなものの一つである。

導師は、尾尻老師、鯛井、竹内の両老師のずいきによって修行。

御詠歌の奉詠は、地元名栗梅花流の奉詠が例によってなされた。

参列者各位は役員を始め、講中、信徒、篤信一般の参拝があつて盛大であつた。

折から三ッ葉つゝじの花ざかりとあつて、山内はにぎわつた



名栗梅花流会員の奉詠



救世観音法要後庭に立たれる平沼先生ご夫妻

とだと拝察できるのである。

救世大観音の法要は十二時に終了した。

参拝の方々はそれぞれに、山内探勝しながら中食をとられたり、庫裡にお入りになって、久方ぶりにゆっくりなされた方もあつて、ひねもすにぎやかだつた。

救世大観音の堂内には、開眼間もない三十三観音が初めての人もあつて皆、珍らしそうに熱心におがむ人のすがたが見えた。三十三観音とは、このような観音であることを身近に見られることが、一そう観音信仰に結びついていくこ



これからの行事と花

○五月の連休と花のお知らせ

四月末から五月

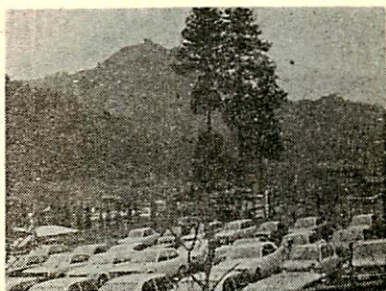
上旬の休みは、毎年多くの行楽客で当山の探勝と参拝団でにぎわってくる。

そのため来山の方々の便を図って駐車場も設置してお待ちしている。

又自動車で入山されても、自動車の駐車場がないとこまるので、山上にも駐車場が二ヶ所あって、山内の探勝も、いそがずにできると思います。

その他歩いて入山される方々は遊歩道がよい。

本堂前から右へ行って遊歩道を登れば、花のきれいな中を探勝しながら、子育て地蔵、仁王門から、大黒様、地球愛護平和観音を参拝して、横道伝いに



本堂前の駐車場

白雲橋と云う、自然橋の石橋を渡って、平道を行けば、大鐘楼へ、上へ曲って行けば、玄奘三蔵法師の靈骨塔前広場へ通じる。

そこからは道は楽になるので、ぶらり、ぶらりとつゝじの花園を眺め、行く程に左に写経塔を見ながら花も見て、大和拓友会の碑の近く岩山もおもしろい。

救世大観音に参拝されれば、時の移るのも忘れる程に堂宇内の美と、靈感にふれることができる。

前の広場から四方を眺めれば、……境内の建物は配置よく、そして整った形と、風景は何とも云いようのない眺めだ。

正面にそびえる玄奘三蔵塔の古色床しい建物があり、中腹には大鐘楼の変わった屋根が樹木の間に見えかくれしている。



玄奘三蔵塔参拝

玄奘三蔵法師靈骨塔法要

五月十七日 十時三十分 塔の内庭

紅のつじが盛りとなる、と一般入山者が多く、自由焼香、自由参拝の用意をする。

藤の花

五月中旬から藤棚のふじの花が咲きはじめる五月末まで花はきれいである。

あじさい

五月の末から、六月一ぱがあじさい園の花がきれいになる。

いろいろの種類の花があつて、いろいろもとどりである。

庫裡の近くなので、花見もらくである。年々この株もふやして、よい花園といえます



白雲山のあじさい園

七月十六日、十四

時東京の盆、施餓

鬼、塔婆供養修行

大観音堂宇内にて

供養して、後広場

供養塔に納めて、

一年間供養します

当日ご参拝下さい

夏でも山上は涼し

くさわやかです。

○流灯法要、花火大会、盆踊り大会。

八月十六日 午後四時 流灯法要 本堂

午後七時 名栗川流灯

午後八時 花火大会

夕 盆踊り大会



夏の白雲山の展望

とりぬ	第四十二号	発行日	昭和五十三年五月一日
編集兼	埼玉県入間郡名栗村	鳥居観音	岡部 千三
発行人	浦和市仲町二一八―十五	武州印刷株式会社	
印刷所	鳥居観音	電話	〇四二九七―九一〇四一七
発行所			

# 白雲山

鳥居観音  
観世者センター案内図



## 夏の行事案内

- 塔婆供養 53年7月16日 午後2時

1塔 1,000円 受付寺務局

- 流灯法要 53年8月16日

1灯 1,000円 受付寺務局

8月16日午後4時本堂にて法要

午後7時名栗川へ流灯

名栗川への流灯の美観はすてきです。

午後8時花火大会

盆踊り大会

} 開催

地元婦人、子供会、飛び入り自由参加で

盛会です。

- 夏の白雲山登山

夏休みに緑の山内へどうぞ、よい空気と

涼風、植物の研究にもなるところ。お帰り

は名栗川で汗を流して下さい。